

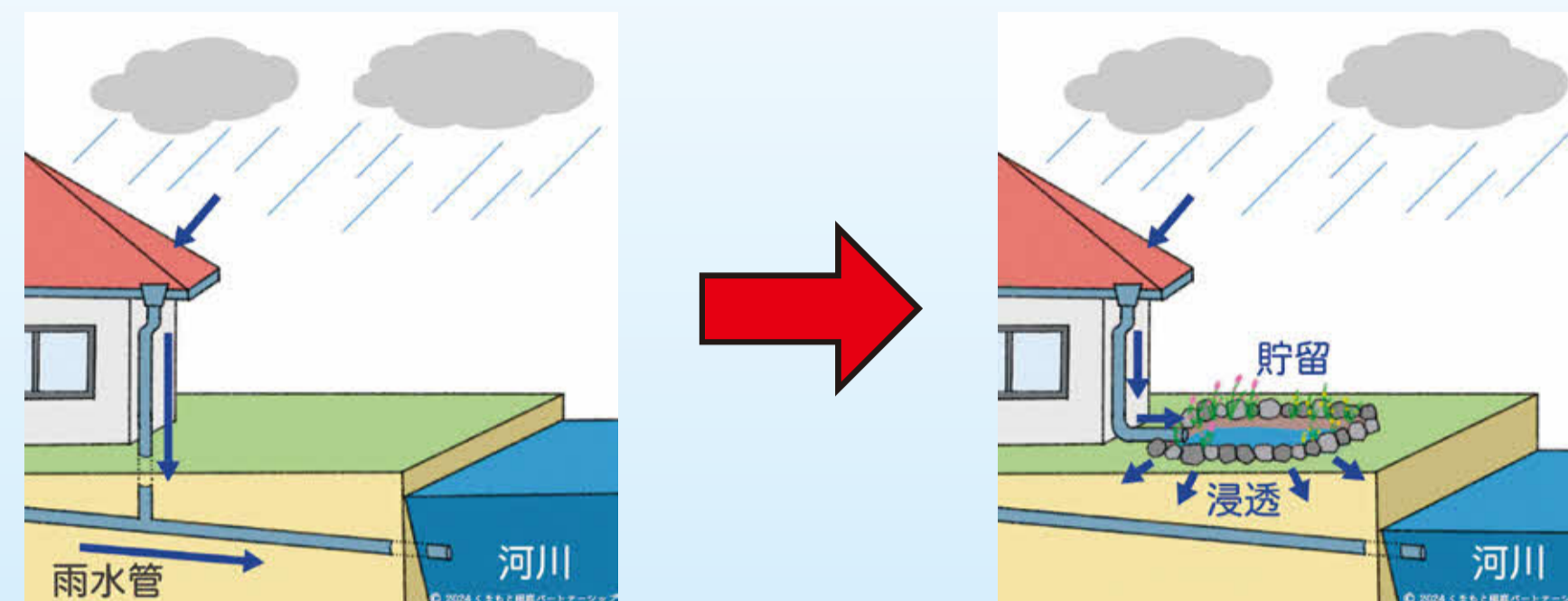


合志市が推進する地下水涵養の取組み「雨庭」

「雨庭」とは

通常、屋根やアスファルトなどに降った雨水は、河川へ直接排水されることになり、豪雨の際には、河川に多くの雨水が集中して流れ込み、一気に河川の水量が増加してしまいます。

「雨庭」は、直接排水することなく、窪地などに一時的に貯留し、ゆっくり地下に浸透させる構造を持った庭や空間を整備することで、地下水涵養や洪水の抑制につなげる効果があります。



イラスト出典：「くまもと雨庭パートナーシップ」

この「雨庭」の構造について

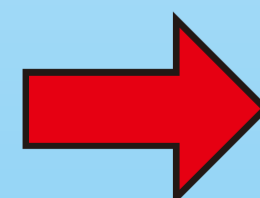
熊本県内の在来植物等を用いた植栽空間とし、集水域の屋根面積約90平方メートルに対して、雨庭の面積は、約16平方メートル、最大深さ35センチメートルとなっており、年間約150立方メートルの雨水を地下に浸透させる構造となっています。

熊本ウォーターポジティブ・アクション

合志市は熊本地域の土地改変に伴う地下水涵養減の影響を緩和するため、雨水浸透の効果が高いグリーンインフラを普及する目的で、熊本県立大学、肥後銀行を始めとした学術機関及び企業が連携して推進している「熊本ウォーターポジティブ・アクション」に賛同しており、今回の雨庭の整備はその取組の一環です。

「雨庭」の浸透能力について

アスファルト等のほとんど雨水が浸透しない土地 1ヘクタールの5%を雨庭(グリーンインフラ)にすることで、同じ面積(1ヘクタール)が全て畑だった場合と同等の1万4千立方メートルの雨水を地下に浸透させることが可能とされています。



出典：「熊本ウォーターポジティブ事務局」

※この雨庭は、熊本グリーンインフラ研究会監修のもと、熊本県の助成を受けて熊本県樹芸農業協同組合が実施する緑化木需給安定対策事業により施工されました。